

東大現代文完全解説

Anchor

平成28年度 第四問

収録

ver. 1.4



初めに	3
現代文とは何か？	3
Anchorとは何か？	3
この教材自体を疑うこと	4
議論すること	4
Anchorに関するお問い合わせ	4
平成28年度	6
第4問	7
解答例	7
本文解説	7
説明解説	12
設問（一）	12
設問（二）	17
設問（三）	28
設問（四）	35
引用文献・著作権表示	42

初めに

現代文とは何か？

受験科目としての現代文とは、与えられた文章（問題文）に基づいて、論理的に読解し、適切な表現を与える能力を測る科目である。実は東京大学もこの定義と同様の方針を表明している¹。この意味で、現代文という受験科目は非常に特殊なゲームであり、一般的な意味における「文章を読むこと」や「文章を書くこと」とは性質が異なるものだと考えて欲しい。それゆえ、ただ読書してみたり、ただ文章を書いてみても、現代文の点数はなかなか上がらない（もちろん、やらないよりはましであるが）。

この「与えられた文章（問題文）に基づいて、論理的な読解をし、適切な表現を与える」という定義の要点は二つある。

一つは、必ず問題文に根拠を求めなければいけないということだ。言い換えれば、専門知識を根拠とした読解をしたり、自分独自の主義主張を展開したりしても、それは全く評価されないということである。この点で、一般的な文章に対する論評とは異なる。また、筆者が何を伝えたかったかに縛られる必要は無いということでもある。筆者が伝えようとはしていなかったが問題文に表現されてしまった事柄は読解する必要があるが、逆に筆者が伝えたかったが問題文で表現されていない事柄は無理に汲み取る必要は無い。私たちが対峙すべきはあくまで問題文であり、筆者ではない。

もう一つの要点は、論理的でなければいけないということだ。裏を返せば、現代文の正しい解答は、論理的に考えるだけで必ず辿り着けるとということだ。そこに閃きや専門知識は全く必要無い。問題文に向き合い、丁寧に論理を重ねていけば必ず攻略できるはずだ。

Anchorとは何か？

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、＜虎の巻＞と＜各年度問題解説＞から成り立っている。＜虎の巻＞では、各年度の問題に共通して通用する方法論について説明している。＜各年度問題解説＞では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り＜各年度問題解説＞のみを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ＜虎の巻＞を参照してから、そして参照しながら、＜各年度問題解説＞を読むようにしてほしい。当た

¹ このことについてはこの章の最後にコラムとして記述している。

り前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とするかが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というものは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてその教材の内容について議論することもとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。実際、Anchorの執筆者も複数人おり、それぞれがつくった答案を突き合わせて、相互に批評しあいながらよいよい答案を練り上げてきた。

勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。

ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。また、文章内を根拠にしたとしても、論理性を欠いてもいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様ではあるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

Anchorに関するお問い合わせ

Anchorに関するお問い合わせは、Webサイト、Twitter、LINE@にてお受けしております。

- ▶ Schip 公式Webサイト <https://schip.me>
- ▶ Twitter @schip__ https://twitter.com/schip__
- ▶ LINE@は以下のQRコードより友達登録をお願いします。



コラム：東京大学の考える「現代文」

東京大学は「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」という文章をWebページ上に記載しており、これを読むことで、東京大学がどんな能力を図りたいかを推し量ることができる。そこでは「文章を筋道立てて読みとる読解力」「それを正しく明確な日本語によって表す表現力」の二つが中核として記述されている。このように、東京大学の示す方針は、「与えられた文章（問題文）に基づいて、論理的な読解をし、適切な表現を与える」というAnchorにおける現代文の定義と相違ない。少し長くなるが、以下に全文を引用する。

国語の入試問題は、「自国の歴史や文化に深い理解を示す」人材の育成という東京大学の教育理念に基づいて、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的とし、文系・理系を問わず、現代文・古文・漢文という三分野すべてから出題されます。本学の教育・研究のすべてにわたって国語の能力が基盤となっていることは言をまちませんが、特に古典を必須としているのは、日本文化の歴史的形成への自覚を促し、真の教養を涵養するには古典が不可欠であると考えからです。このような観点から、問題文は論旨明快でありつつ、滋味深い、品格ある文章を厳選しています。学生が高等学校までの学習によって習得したものを基盤にしつつ、それに留まらず、自己の体験総体を媒介に考えることを求めているからです。本学に入学しようとする皆さんは、総合的な国語力を養うよう心掛けてください。

総合的な国語力の中心となるのは

- 1) 文章を筋道立てて読みとる読解力
- 2) それを正しく明確な日本語によって表す表現力

の二つであり、出題に当たっては、基本的な知識の習得は要求するものの、それは高等学校までの教育課程の範囲を出るものではなく、むしろ、それ以上に、自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視します。

そのため、設問への解答は原則としてすべて記述式となっています。さらに、ある程度の長文によってまとめる能力を問う問題を必ず設けているのも、選択式の設問では測りがたい、国語による豊かな表現力を備えていることを期待するためです。

(引用元：http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_01_18_j.html)

(アクセス：2016年12月25日)

平成28年度

第4問

堀江敏幸「青空の中和のあとで」

解答例

設問（一）	所謂天気予報を当てにすることは、天候の変化をその直前に予感し、日常の延長線上に非日常を見出すための機宜を無に帰することになるから。（65字）
設問（二）	知覚上にのみ存在する青が、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。（68字）
設問（三）	単調な日常の表面的な維持には、内心の暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く刷新することが必要だということ。（63字）
設問（四）	空の青が赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したとは言え、斯様な日常の崩壊と再生の連鎖こそが筆者の体験の質を高めていくのだということ。（71字）

本文解説

丁寧にエッセイの本文読解の虎の巻を適用しよう。そうすればだんだんこの文章の輪郭ははっきりしていくはずだ。しかし、この文章はちょっと難しいのも事実だ。なぜなら、本文全体を通じてエッセイのテーマ（以下これを「全体テーマ」と呼びたい）が明確にどこかに書いてある

わけではないからだ。だから、単に記述を整理しただけでは、筆者の描く事柄がそれぞれバラバラのまま存在してしまって、それらの間の関係がわからなくなってしまう、とりとめのない読解しかできない。直接的に書かれていないながらも、各々の話題から全体テーマを想像し、今度はその全体テーマを元に各々の話題で言われていることと丁寧に解きほぐしていく必要がある（この読解の大まかな流れ自体はエッセイの読み方の基本なので、そこは見失わないでほしい）。

それでは以下、本文を頭から順に一緒に読解してみたい。

最初に述べられている話題は「青空」についてだ。第一段落には「私は十数分の非日常を、まぎれもない日常として生きた」とある。どうやら「非日常」とは悪天候のことであるようだ。とすれば「日常」は晴天であろう。そして筆者は「日常」と「非日常」の一体性・連続性を強調しているようだ。

では「日常」と「非日常」は完全に一緒のものなのか？第二段落を見ると、ちょっとそれは違うようだ。「平らかな空がいかにかりそめの状態であるのか」とあるように、「日常」はあくまで「かりそめ」であるようだ。「日常」と「非日常」は、仮初と内実の関係にあるようだ。

第二段落の最後から第五段落をまで見ると、筆者はその「非日常」を楽しみに待っているようだ。「非日常」である荒天は「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」と表現している。ただ、第三段落の「破れ目」というのはどういうことか？よくわからない。そしてなぜ荒天がそんなに喜ばしいものなのか？第二段落には「不意打ちのように示してくれる」とある（傍点は解説者による・以下本問の解説では全て同様とする）。「日常」が仮初であることは筆者は示して欲しいということだ。しかし、なぜそれが有難いことなのかはまだちょっとわからない。これらについては、一旦保留。とりあえず次に進もう。

第六段落はこれまでの総括の様になっている。ここでも「崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする」とも書かれていることから、やはり「日常」と「非日常」の一体性・連続性は大きなポイントでありそうだ。ここまでわかったことを表にしてみよう。

「日常」＝「青空」 仮初の姿。	⇔	「非日常」＝「荒天」 内実の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・ あくまで「日常」と「非日常」は一体化・連続している。 ・ 「非日常」の現前は、「日常」が仮初であることを示してくれるという点で「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」である。 		

二つ目の話題はどうやら「青色」についてであるようだ（なお、この箇所についての解説は設問(二)の項に詳しいので、ここでは大筋だけを述べる）。筆者は、「青色」は海のものにしても空のものにしても「幻」であるのだという。というのも、海の青は「手を沈めて水をすくったとたん」消えてしまう。一方で空の青は「いったん空気中の分子につかまったあと放出された青い光の散乱にすぎない」「孤独な色」であり、「その色に、私たちは背伸びをしても手を届かせることができない」。確かに、海の実体は大量の水の運動であるし、空の青もまた、透明な空気中の光の反射という物理運動の結果である。そして、そのような物理運動は「重い現実」として自然災害時にのみ私たちの前に現前するのだ。このような青の様子は、「穏やかな表情を見せながらも弾かれつづける青の粒の運動を静止したひろがりとして示すという意味において、日常に似ている」のである。

「日常」と「青色」の関係が示された。「日常」は仮初で「青色」は「幻」である。この点は明らかに類似していると言える。そもそも、「日常」は「青空」だったのだから、ある種当たり前のことなのかもしれない。そして「日常」が「非日常」と連続しているように、「青色」は物理運動を抑圧しその上に成立している。共通性が見えてきた。ここまでの全体テーマはこんな感じだろうか？

<p>「日常」＝「青空」＝「青色」</p> <p>仮初・幻 穏やか 孤独</p>	<p>⇔</p>	<p>「非日常」＝「荒天」＝「物理運動」</p> <p>内実 抑圧されている</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ あくまで「日常」と「非日常」は一体化・連続している。 ・ 「非日常」の現前は、「日常」が仮初であることを示してくれるという点で「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」である。 		

三つ目の話題は「心」だ（なお、この箇所についての解説は設問(三)の項に詳しいので、ここでは大筋だけを述べる）。第十段落には「単調な日々を単調なまま過ごすには、ときに暴発的なエネルギーが必要になる。しかしその暴発は、あくまで自分の心のなかで静かに処分するものだから、表にあらわれでることはない」とある。

むむ、さっきの図式と似ている。「単調な日々」というのは、おそらく「日常」と同じことを指していそう。逆に隠れていて見えない「暴発的なエネルギー」は抑圧された運動である「非日常」のことだろう。そういえば、最初の話題である「青空」における＜非日常＞も非常に荒々しいもののことだった。だとすると、「非日常」＝「暴発的なエネルギー」は「日常」＝「単調

な日々」に「必要になる」というのも合点が行く。これらは一体化していたのだ。なお、これは勝手な推測になるが、この裏には「変わり続けられないものは無い」という思想があるように見える。万物流転、諸行無常。この世では、変わらないことこそがありえないことなのだ。だとすると、本当に単調な日々というものもまたあり得ないはずだ。それはあるように見えるが、その裏に絶え間ない暴力的な運動性があるからである。筆者が伝えたいイメージはそんなことではなかろうか。

続きを見ると「心の動きは外から見るかぎりどこまでも平坦である」とある。「日常」はあくまで穏やかなものであった。この点も類似している。そして次には「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剥ぎとる」とある。おそらく、「内壁」とは「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」の境目にあるものだろう。ということは、この「内壁」は「日常」と「非日常」の間にもあるのだろうか？

そんなことを考えていたら、こう書いてあった。「そういう裏面のある日常とこの季節の乱脈な天候との相性は、案外いいのだ」。やはりどのモチーフもイメージは共有しているようだ。全体テーマを整理しよう。

「日常」＝「青空」＝「青色」＝「単調な日々」 仮初・幻 穏やか 孤独	内 壁	「非日常」＝「荒天」＝「物理運動」＝「暴発的なエネルギー」 内実 抑圧されている
<div>・ あくまで「日常」と「非日常」は一体化・連続している。</div> <div>・ 「非日常」は「日常」に必要であると言って良い。</div> <div>・ もし「日常」と「非日常」の均衡が崩れるようならば、その間の壁はむしろ一気に剥がしてしまうべきである。</div> <div>・ 「非日常」の現前は、「日常」が仮初であることを示してくれるという点で「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」である。</div>		

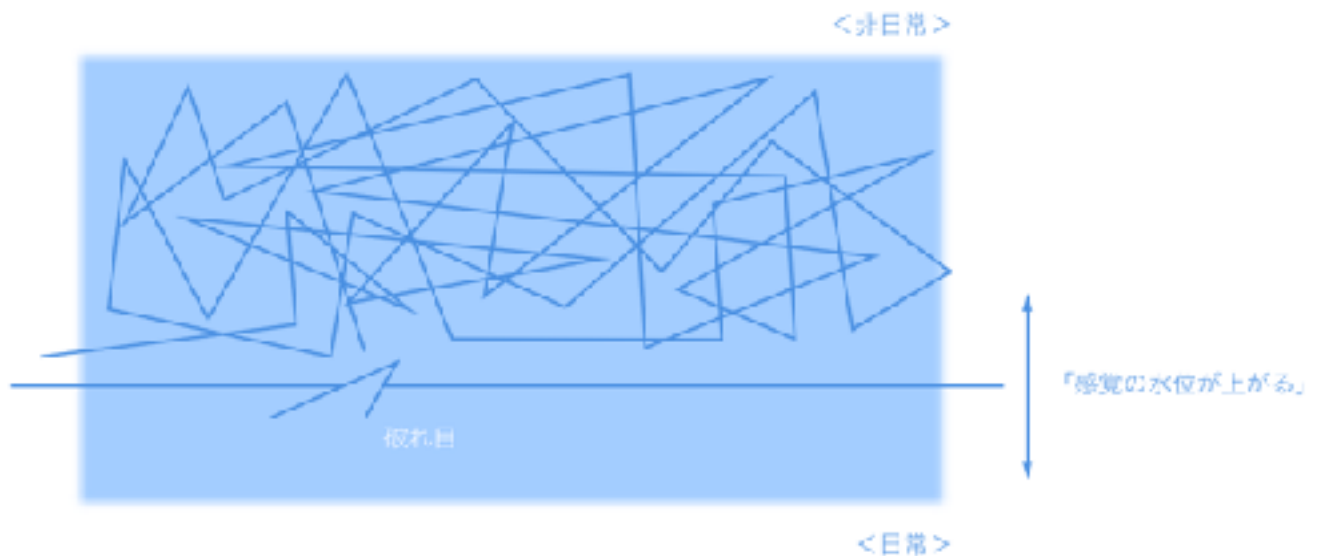
第十一段落には、ついに筆者が天候の急変を待ち望む理由も書いてあったみたいだ。「青空の急激な変化を待ち望むのは、見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙に中和するためでもある」とある。どうやら筆者は、目に見える悪天候に、目に見えない自分の内面の「暴発的なエネルギー」を投影することで、自分の心の中の均衡の崩壊を感じ取っていたのだ。それは、両者が同じ「非日常」の構図を共有しているから可能になる。そして均衡が崩

れた時には、むしろ間の壁は綺麗に取っ払ってしまおう。壁が消失した先にあるのは、両者の「中和」である。そしてそれこそが「ありがたい仕合わせ」である。

ここまで来ると、高度に比喩的で今まで謎に満ちていた筆者の言葉遣いも納得できるようになる。続く文には「この小さな変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め、破れ目を縫い直したあとでまた破るような、べつの出来事を呼び寄せるのだ」とある。二つの点が気になる。一つは「体験の質」だ。思えば第五段落に「日常の感覚の水位があがる」とあった。先ほど検討したように、悪天候を「非日常」として予感し、それに心模様を投影することで、結果的に心の不均衡を予知しているのだとすれば、これは同じことを述べていると考えられる。二つ目は、「破れ目」だ。第三段落にも、天候の急変は心に「破れ目」を作るとあった。心の中には「内壁」があり、それは不均衡の表れに応じて取りさらわれるのだ。だとすれば、これらの「破れ目」は「内壁」の中にあるのだろう。再び全体イメージをまとめよう。

<p>「日常」 = 「青空」 = 「青色」 = 「単調な日々」</p> <p>仮初・幻 穏やか 孤独</p>	<p>「内壁」 「水位」</p>	<p>「非日常」 = 「荒天」 = 「物理運動」 = 「暴発的なエネルギー」</p> <p>内実 抑圧されている</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ あくまで「日常」と「非日常」は一体化・連続している。 ・ 「非日常」は「日常」に必要であると言って良い。 ・ もし「日常」と「非日常」の均衡が崩れるようならば、その間の壁はむしろ一気に剥がしてしまうべきである。そうした心の「内壁」には「破れ目」ができる。 ・ そのような均衡の崩壊と再生によって、筆者自身が変貌し、体験の質は上がる。 ・ 「非日常」の現前は、「日常」が仮初であることを示してくれるという点で「ある種の救い」「一種の恩寵」をもたらす「ありがたい仕合わせ」である。 		

「水位」と「天地」というイメージがあるからには、「日常」と「非日常」の対比もまた上下の対比に捉えた方が良さそうだ。図にするとこんな感じになるだろう。



しかし、本文ではこれで終わりではない。最後の部分では、「赤い風船」がセンセーショナルなデビューを飾っている（この「赤い風船」の箇所については設問(四)の解説で詳しく述べる）。「貴重な青は、天を目指さない風船の赤に吸収され、空はこちらの視線といっしょに地上へと引き戻される」。どうやら「赤い風船」は「青空」のイメージを一掃してしまったようだ。確かに、「赤い風船」はこれまでの「青空」のイメージと全く異質である。そうして泰然と青を否定する赤い風船は、筆者の「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去り」、そして筆者は「奇妙な喜びを感じつつ、茫然とした。」のであった。筆者の身には何が起きているのか？いや待て。思えば、「青の明滅に日常の破れ目を待つ」営みは、「この小さな変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め、破れ目を縫い直したあとでまた破るような、べつの出来事を呼び寄せる」のであった。きっと筆者はこの「断続的な繰り返し」のサイクルを回し続けるのであろう。そして文章はこう締めくくられたのだった。「再び失われた青の行方を告げるように、遠く、雷鳴が響いていた」。

説明解説

設問（一）

問題

「何かひどく損をした気さえする」（傍線部ア）とあるが、なぜそういう気がするのか、説明せよ。

解答例	所謂天気予報を当てにすることは、天候の変化をその直前に予感し、日常の延長線上に非日常を見出すための機宜を無に帰することになるから。(65字)
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 設問文読解 ・ 傍線部読解 <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「損」とは何か？何が失われたのか？ ・ なぜ「損」をしたのか？ ・ 「損」より軽度な何らかの被害は何か？ <p>表現フェーズ</p>

構成フェーズ

設問に「なぜそういう気がするのか、説明せよ」とある。「そういう気」とは筆者の考えなので、「筆者がなぜそう考えるのか」について回答する必要があることがわかる。よって、回答すべきその理由は、筆者の主観的で個人的な感じ方であって良いが、一方で読み手の常識や推察はいつも以上に注意して排除するべきであろう。

次に傍線部を見る。主眼は「損」であろう。「損」とはどういうことだろうか？言葉の意味としては、損とは「少なくしてしまうこと」「壊してしまうこと」である。失われたものが何か、そしてどうして失われたのかをはっきりさせることが重要だ。また、「気さへする」という累加の表現も使われているので、「損」をより軽度な何らかの被害と比較することも必要だ。よって、読解フェーズで考えるべきは以下の問いだ。

- ・ 「損」とは何か？何が失われたのか？
- ・ なぜ「損」をしたのか？
- ・ 「損」より軽度な何らかの被害は何か？

読解フェーズ

傍線部の直前を見れば、なぜ「損」をしたのかはすぐにわかる。「すれちがいざま、これから降るらしいよといった会話を耳に挟んだりすると」とあるので、このような天気予報が「損」の原因である。

次に、「損」より軽度な何らかの被害が、「損」の重大なヒントになると思われるので、そこから考えてみる。傍線部の前から被害めいたものを探すと、直前の文に「予報は、ときに、こちらの行動を縛り、息苦しくする」とある。これが「損」より軽度な何らかの被害であろう。ここまでを踏まえると、天気予報により、「行動を縛り、息苦しく」されるだけでなく、「損」すらもしてしまうというのが、傍線部の意味である。

手がかりを探すためにさらに前を遡ると、「なにかが起こってから、あれはよい意味での虫の知らせだったとするのはどこか不自然なのだ」とある。筆者は「よい意味での虫の知らせだったとする」ことに否定的だ。なぜか？そのさらに前には「自分のアンテナを通じて入ってきた瞬間にそれが現実の出来事として生起する、つまり予感とほとんど時差のない一つの体験であって」とある。その話題は「破れ目につながる日々の感覚」であり、「破れ目」とは悪天候が生み出すものである。つまり、人間は本来「予感」によって現象を同時間的に直前に感覚するものだというのが筆者の主張であるらしい。だから「よい意味での虫の知らせだったとする」ことに否定的だったのだ。

ここまでをまとめると、傍線部の意味は、天気予報により、「行動を縛り、息苦しく」されるだけでなく、「予感」によって現象を同時間的に直前に感覚する人間の本来の感覚すらもしてしまうということであることがわかる。確かに、天気予報とは、現象が起きるだいぶ前に知るものである。

しかしここで、もう一歩深く疑問を持って欲しい。「予感」を失うことは、なぜ損失なのだろうか？言い換えれば「予感」にはどんな価値があったのだろうか？そのヒントとなるのは、傍線部の後に書いてある。筆者は、荒天を「一瞬の、ありがたい仕合わせと見なし、空の青みの再生に至る契機を、一種の恩寵として受けとめ」ている。そして、これはなぜなら、「崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする」ことで、「非日常を、まぎれもない日常として生きる」[第一段落]ことができるからだ（この箇所は本文全体に関わることなので、適宜本文解説も参照して欲しい）。逆に言えば、「予報」によって事前に荒天という非日常を知ってしまうことは、本来日常と背中合わせにあるはずの非日常を、日常から引き剥がすことになる。これらのことを踏まえて、解答を書いてみよう。ここではまだ字数は気にしない。

天候の変化を事前に知らせる予報を当てにすることは、人間が本来持っているはずの、自分自身の感覚で天候の変化を直前に予感する能力を失わせ、日常の延長に非日常を見出すための好機を逸するとつながるから。（98字）

表現フェーズ

「天候の変化を事前に知らせる予報」は、一般的なもののなので「天気予報」と言って差し支えないだろう。後半も、「予感を失わせ、好機を逸する」では長いので、重要度の低い「予感を失わせる」方は簡略化する。「感覚」だとか「能力」だとかいうここでは似た意味となる言葉もまとめてしまおう。「逸する」という語彙も、勿体無い感を強調するために「無に帰す」としてみた。

所謂天気予報を当てにすることは、天候の変化をその直前に予感し、日常の延長線上に非日常を見出すための機宜を無に帰することになるから。(65字)

他社解答例の講評

赤本

答案				
Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：1点	表現点：0点

予報が「その貴重な機会を奪う」理由についての説明が不十分だ。詳しく言い換えれば、「日常と非日常は連続しており、よって人間はほぼ同時間的に非日常を予感することできるはずなので、事前にその到来を知る羽目になってしまう予報はその予感の機会を奪う」という論理がはっきりと説明されていない。「～～な筆者にとって予報は貴重な機会を奪う」と述べただけでは、「～～の」中に「機会を奪ってしまう」の理由が述べられているのかいないのかわからない。よって、構成点は減点された。

駿台（青本）

答案				
Schip採点	2点	読解点：0点	構成点：2点	表現点：0点

構成としては良いが、局所的には三つの問題点がある。第一に「非日常の恩寵」では曖昧すぎて説明になっていないだろう。少なくとも日常と非日常の連続性について触れるべきである。第二に「自分を束縛する」も説明不足である。そこを説明するのがこの問題の要求の一つである。第三に、予報が非日常の恩寵を「既定の出来事」にする点が「損」の本質だとすれば、失われたのは非日常の“未定性”だということになる。これは本文の主旨とずれている。重要なのは未定か既定かではなく、筆者が自身でそれを予感できるかどうかである。もし「既定」を“予感可能性”と

同一視するならば、それは「現象の確定はそれを認識する側が決める」という前提が必要だが、その前提は答案に表現されていないし、本文にも述べられていない。よってこれは誤りであると言える。これらの三つの問題点により、読解点は0点である。

河合塾

答案				
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点

綺麗にまとまっている様に見えて、所々詰めが甘い。＜予感＞の要点は同時的でありつつもあくまで直前に感じることであり、「突然」感じるかどうかではない。また、「非日常的な恩寵」という表現は曖昧すぎる。＜予感＞について説明するには、日常と非日常の連続性こそが重要なのであるから、その要素を記さないといけない。この答案では本文全体の趣旨を理解していないように見えてしまう。この点で読解点を減点した。

東進ハイスクール

答案				
Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：-1点

字数が多すぎるため表現点が減点される。「予感」が現象の直前に行われることを明示した方が、予報ー予感の対比と「予報を介して得られない」理由を明確化できるという点で望ましいが、減点はされない程度かもしれない。

代々木ゼミナール

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

ひどい答案だ。まず答案の着地が致命的に間違っている。この答案と設問を繋ぎ合わせて、設問で必要とされている形式の論理を構成すると、「奪われたと感じたから損をした気がする」と

なる。全く説明になっていない。「奪われた」ことは「損をしたこと」と同じことを指示しているので、理由を説明したことにはならない。また、答案を部分的に見ても各々意味が不明である。「平凡な日常の中に突如訪れる不穏な予感と急激な非日常の世界」は何を指しているのか曖昧すぎる。「不穏」とは何のことか？「非日常」が「急激」であるとはどういうことか？そして「世界」とまで一般化する必要はあるのか？なぜその「機会」が「貴重」なのかについても不明であり、「他者の予報」によってそれが奪われる理由も不明である。「他者」と言及したからには、自他の対比が重要である様に答案からは見受けられるが、本文で論点となっているのは自他ではなく事象の連続性や時間についてである。設問と関連する風の語彙が散りばめられているが、説明すべきことは何も説明していない答案である。

スタディサプリ（制作：旺文社）

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

駿台（青本）の答案と似た誤りである。非日常の破れが私たちにもたらしてくれるのは、それが突然であることによる驚きではない。根本的に本文を読み違えていると考えられる。

設問（二）

問題	「青は不思議な色である」（傍線部イ）とあるが、青のどういうところが不思議なのか、説明せよ。
解答例	知覚上にのみ存在する青が、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。 (68字)

構成フェーズ

- ・ 設問文読解
- ・ 二種類の「青」

読解フェーズ

- ・ 「海の青」の性質は何か？
- ・ 「空の青」の性質は何か？
- ・ 「海の青」と「空の青」の性質を統合して一般化するとどんな性質が見出だせるか？
- ・ 「空の属性」とは何か？
- ・ 「青」の性質の中のどこに逆説性があるか？
- ・ 【発展】「重い現実」とは？
- ・ 【発展】「青」の性質と本文全体の趣旨との関係は？

思考の目次

表現フェーズ

- ・ 重複する表現をまとめる。

構成フェーズ

設問文を見よう。「青のどういうところが不思議なのか、説明せよ」とある。ここでのポイントは二つだ。一つは、主題が「青」に限定されているところ、もう一つは、不思議さを説明することが求められているところだ。不思議さの説明には、大抵の場合で逆説が必要だ。よってここまでの設問文の確認によって、逆説的な「青」の性質を探るのがこの設問の基本戦略であることがわかる。次に傍線部を見るが、本問の場合は、設問文に傍線部自体の内容も書かれてしまっている、特に補足点はない。よって、先述の基本戦略は変わらない。

ただし、本文には二種類の「青」が挙げられていたことには注意しなければならない。傍線部直後にある「海の青」と、続く第八・第九段落にて述べられている「海の青」である。設問で「青」としか指定されていない以上、これらの両方に言及すべきだろう。よって、この二つの「青」の性質を一般化して統合することが最初の課題になりそう（もちろん、もしそれが不可能そうであったら、仕方ないのでそれぞれの性質を別個に述べることになる）。

よってここまでを踏まえて、読解フェーズでは以下の問いを検討していくことにしよう。

- ・ 「海の青」の性質は何か？

- ・ 「空の青」の性質は何か？
- ・ 「海の青」と「空の青」の性質を統合して一般化するとどんな性質が見出だせるか？
- ・ 「青」の性質の中のどこに逆説性があるか？

読解フェーズ

この読解は最高レベルに難しい。文章全体との関係性が見えにくい上に、断片的な比喻をつなぎ合わせる必要があるからだ。論理を単純に繋げばそれで終わりとはならない。なので、根気よくわかることを文章から拾い、そこに少しの想像力を足して読み解いていこう。というわけで、まずは本文の手がかりを拾っていくことから始める。

筆者は、「海の青」は「幻」だと言う。幻だということは、言葉の意味からして、実際には無いのにそう見えてしまうということだろう。筆者はその理由を「手を沈めて水をすくった途端青でなくなる」からだと言う。少し想像してみよう。海岸で海の水を掬って見る。するとそれはきつと、透明であろう。言われてみれば当たり前のことだ。ここまでをまとめると、(A-1)「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまう」ということになる。（後で参照するために傍線部にした。）

続きを見る。「海は極端に色を変えた時、幻を重い現実に変える力を持つ」。これは何のことだろう。完全に想像になるが、海の「重い現実」という言葉から連想されるのは、海難事故や津波などだろう。ただし、これはあくまで勝手な想像に過ぎない。確実にわかることは(B-1)「幻」と「(重い)現実」が対比される概念であることだ。

「重い現実」の意味については、一旦保留して次の文を見る。次の文には、「海の青」への「怖れ」と「愛」が述べられているが、これもまた難しい。先ほどの「重い現実」のイメージと総合すると、何となく、危険と隣り合わせながらも海に生きる男の姿が浮かんできそう。だがこれもあくまで勝手な想像だ。現代文というゲームにおいてはあまり役立たない。これも保留しておこう。

では、「空の青」について見てみよう。これもまた「幻」であるようだ。その理由は、筆者によれば、空の青は、大気中の光の散乱の中で、そのごく一部にすぎない青色の散乱のみが残った結果であるからだ。この「幻」の性質は、「海の青」と同じであろう。「海の青」も結局は青色になる波長を持った光の散乱なのだ。だから先ほど見たように、掬い上げてしまうと透明になってしまうのだ。次の文はこうだ。「私たちは背伸びをしても手を届かせることができない」。確かに、それがその波長の光が青色に見えるのは、人間の知覚がそうなっているからでしかない。人間の知覚のシステムが私たちにそう見させていると言って良いだろう。その意味で(A-2)「青色」は私たちの知覚の中にしかないのだ。だからそこに物体として到達することができない。

続く第九段落を見てみよう。まず、空は「当たり前のように遠い」とされる。空は遠くにあるのが当たり前だということだ。どういうことだろうか？ 次の文を見ると意味がわかる。「飛行機で空を飛んだら、それは近すぎてもう空の属性を失って」しまう。「空の属性」を失うということを裏返すと、「空の属性」があるということだ。そして「空の属性」があるのは、きっと「当たり前のように遠い」時なのだろう。その意味で、「遠く眺めて、はじめてその乱反射の幻が生きる」のだと筆者は言う。この箇所を図式化すると、どうやら二項対立になりそうだ。(B-2)少しアバウトに等式関係で繋ぐと、以下のようになる。

・ 「遠い時」 = 「当たり前」 = 「空の属性」がある = 「幻」

・ 「近い時」 = 「 ? 」 = 「空の属性」は失われている = 「？」

さて、これで手がかりが出揃った。これまで出た手がかりをまとめ、できれば統合していきたい。尚、以下の(A-1)と(B-1)は「海の青」の描写からわかったこと、(A-2)と(B-2)は「空の青」の描写からわかったことである。

・ (A-1)「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまう」ということである。

・ (A-2)「青色」は私たちの知覚の中にしかない。

・ (B-1)「幻」と「(重い)現実」が対比される概念である。

・ (B-2)「遠い時」と「近い時」の対比の図式がある。

(A-1)と(A-2)はそのまま統合できそう。すると「幻」とは何かわかる。「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまうことであり、その意味でその青色は私たちの知覚の中にしかない」ということである。そして、(B-1)と(B-2)もまた統合できそうである。なぜなら、(B-2)の図式の中で、「遠い時」 = 「幻」という(アバウトな)等式関係があったからである。統合すると、(B-2)の最後の「？」を埋めることができる。

・ 「遠い時」 = 「当たり前」 = 「空の属性」がある = 「幻」

・ 「近い時」 = 「 ? 」 = 「空の属性」は失われている = 「現実」

この対比関係をよくみると、(A-1)と(A-2)を統合してわかった「幻」の定義と、(B-1)と(B-2)を統合してわかった対比の図式も統合できそう。なぜなら、後者の図式に「幻」は含まれているのだから。横に並べると長くなりすぎるので、表にして整理してみよう。

「遠い時」	「近い時」
「当たり前」	
「空の属性」がある	「空の属性」は失われている

「遠い時」	「近い時」
「幻」	「現実」
青色は私たちの知覚の中にしかない	
実際には透明なのに青色に見えてしまう	

最後の「実際には透明なのに」というのは、この対比の図式の中で処理可能だろう。「実際には〇〇である」ということは、その性質は対比されている相手に包含されるべきであるはずだ。

(海や空の) 「遠い時」	(海や空の) 「近い時」
「当たり前」	
「空の属性」がある	「空の属性」は失われている
「幻」	「現実」
青色は私たちの知覚の中にしかない	
青色に見えてしまう	実際には透明である

多少アバウトな等式関係を元に図式を作ってきたものの、結果として妥当な図式が完成した。さて、最終的に私たちに取り組むべき問いは、「青」の性質の中にどんな逆説性があるかであった。よって、それを検討するには、この図式も「青」を中心に組み直すべきだろう。

「青色」	透明
「幻」	「現実」
(海や空の)「遠い時」 「空の属性」がある	(海や空の)「近い時」 「空の属性」は失われている
「当たり前」	
私たちの知覚の中にしかない	

青の性質のどんなところが逆説的なのか、少しずつ見えてこようとしているが、まだ完全にはつかみきれない。なので、もう少しこの図式について考えてみたい。そもそも、「空の属性」があるとはどういうことか？「属性」とはそのまま「そのものに属する性質」ということだ。ということは、「空の属性」が何かから無くなるということは、そのものから「空」という性質が無くなるということだ。それはつまり「空」では無くなるということだと言って差し支えないだろう。つまり、遠くから眺めると其れは「空」であるが、近くから眺めると其の其れは「空」ではないということだ。紛らわしくなったが、本文に挙げられている飛行機の実例を考えれば簡単にわかる。飛行機で窓から見るとその空間は、地上から見た時の「空」だ。航空会社が提供する

のは「空の旅」である。しかし、飛行機から窓の外を見て、「横に空があるね」と言ったらどうか。違和感がある。では、その時横にあるのは何と言うべきか。おそらく「空気」とか「大気」とかであろう。地上から見た時「空」であるそのものは、近くで見ると「空」ではなく「空気」であるということだ。同じことが「海」にも言える。「海」に行く。「海」岸に立つ。あなたは「海」の「水」を掬う。掬ったそれを何と呼ぶか。おそらく「水」であろう。譲歩しても「海水」、あくまで「水」の範疇だ。「ねえ見て、海を掬ったよ」と言ったら、あまりに詩的ではないか！

これを読んだあなたは今「言われてみれば不思議だなあ」と思ったのではないか。初めてこれに気づいた私たちもそう思った。そして、設問で求められていたのはまさにそれなのだ。ここに設問の中核がある。不思議なのは、海や空は、実際には透明な「水」や「空気」であるにもかかわらず、「幻」である「青色」こそが、それらを「海」や「空」たらしめていることなのだ。

ここまでで、答案の概略は掴めた。ただし、設問は「青のどういうところが不思議なのか」説明することだったことを忘れないようにしたい。上記の「海」と「空」と「水」と「空気」の不思議な関係を、「青」を主役を書いてみよう。

青は、「幻」であるにも関わらず、実際には透明な水や空気である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(53字)

中核は抑えたが、説明不十分な点が三つある。第一には「幻」の説明が不十分な点、第二に「水や空気である」の箇所が一般化されていない点、そして最後に「『海』や『空』たらしめる」の説明が不十分な点である。

「幻」は「実際には透明なのに青色に見えてしまうことであり、その意味でその青色は私たちの知覚の中にしかない」ということだった。前半部は答案に既に示されているので、後半部だけを盛り込めば大丈夫だ。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、実際には透明な水や空気である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(59字)

次に「水や空気である」の箇所を一般化したい。一般化して記述しない限り、それは描写したに過ぎず、説明したとは言い切れないだろう。知覚の中にしかない「幻」と対比されているのが重要であるので、「物理現象」「实在論的」などの言葉で表現するのが良い。本文中に光の反射の話が述べられていたり、後者が徒らに哲学的であることを踏まえて、ここでは前者の「物理現象」という言葉を使うことにした。参考までに、答案の下に先ほどの図式を更新したものも載せておく。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、実際には透明な物理現象である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(59字)

「青色」	透明
「幻」	「現実」
(海や空の)「遠い時」 「空の属性」がある	(海や空の)「近い時」 「空の属性」は失われている
「当たり前」	
私たちの知覚の中にしかない	実在論的な物理現象

「『海』や『空』たらしめる」については、先ほどの「属性」についての議論をもう少し検討してみたい。遠くで見るか近くで見るかによって、つまり「青色」であるかによって、それが「海」や「空」であるかが変わってしまうということのおもしろさはどこにあるだろうか。それは、内実としては同じ物体・物理現象であることだろう。なのに、「海」や「空」と呼ぶかが変わってしまうのである。言い換えれば、この「海」や「空」は、あくまで言葉の上にのみ存在する概念であるということなのだ。具体的に対応する事物が存在しているように見えるこのような「海」や「空」という言葉が、実は言葉の上にのみ存在する概念という側面も持っていることを示しているのが筆者の文章のおもしろところだ。さて、これを踏まえると、答案の「『海』や『空』たらしめる」については、これらがあくまで言葉の上での話であるということを強調したい。ここまで全てを踏まえると、以下の答案が完成する。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、実際には透明な物理現象である海や空の、言葉の上での概念を規定しているところ。(59字)

ほぼ満点だ。ただ、まだ二つ改善点がある。以下に述べることは、これまでの一直線的な議論の中からは導かれないし、考える労力の割には、点数にならないかもしれない。なので発展課題だと思って見て欲しい。

まず最初の論点。これまでに触れてきたことの中で、保留してあったことが二つある。一つは、「海は極端に色を変えた時、幻を重い現実に変える力を持つ」こと、もう一つは、「海の青を離れるのは、それを愛するのと同程度に厳しい」ということである。この中で後者については、結論から言ってしまうと私たちも結局読み解けていない。無念！ぜひ筆者と語り合わせていただきたいものだ。

しかし、前者についてはこれまでの議論を元に考察の余地がある。「現実」とは海や空の物理現象的側面であった。では、青が「極端に色を変えた時」の「重い現実」とは何のことか？「重い」にも様々な意味があるが、「深刻である」という意味にとってみよう。すると、「重い現実」とは、言わば深刻な物理現象としての海や空のことを指すことになる。ここまで来ると、「重い現実」を津波や台風などの自然災害と結びつけることも妥当な連想だと言って良いだろう。遠くから眺めると「海」であり、近づいて触れると途端に「水」になってしまう海が、津波として目

の前に現れた時はどうだろうか？人々はそれを「海が襲ってきた」と感じるだろう。遠くから眺めると「空」であり、飛行機で横から見ると「空気」になってしまう空が、暴風雨として自分の家を吹き飛ばしたらどうだろうか？人々はそれを「空が暴れている」と感じるだろう（少なくとも「空気の反乱」ではないはずだ）。よって、空や海は、遠くに見る時の「幻」の「青」がその意味を定義していて、近づくと「海」や「空」ではなくなるのだが、一方で自然災害（＝怖るべき物理現象）として現前した際には、あくまで「海」や「空」に戻るのである。これもまた不思議なことだ。実は「青」の不思議さには二重の逆説があったのである。まとまりがなく、設問への答えにもなっていないが、一旦この論点を盛り込んで文章にしてみる。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、実際には透明な物理現象である海や空の、言葉の上での概念を規定している。しかしさらに一方で、物理現象としての海や空は、自然災害としてのみ現前する。（99字）

さて、もう一つの発展的な論点についても考えてみたい。それは、この「不思議な色」としての「青」がこの文章全体の趣旨（本文解説で述べた「全体テーマ」）の中でどう位置付けられるか、という点である。この文章の全体テーマは、要するに＜日常＞と＜非日常＞の対比であった。「不思議な色」としての「青」にこの対比はどう当てはまるか？これを考える上では、「青色」と透明の図式の中に取り残されていた「当たり前」と、先ほどの「重い現実」の議論が参考になるだろう。つまり、「幻」が「空」や「海」の概念を規定しているのは、あくまで「当たり前」の状況＝＜日常＞においてのみであるのだ。なぜなら、先ほど検討した通り、「重い現実」という＜非日常＞が現れ出た時、「空」や「海」の概念を規定しているのは物理現象としての側面だからである。この対比を、先ほどの図式に当てはめてまとめてみよう。

「青色」	透明
「幻」	「現実」
私たちの知覚の中にしかない	実在論的な物理現象
＜日常＞＝「当たり前」「遠い時」において 「海」や「空」の言葉の上での概念を規定する	＜非日常＞＝自然災害において 「海」や「空」の言葉の上での概念を規定する ※＜日常＞における「近い時」には 「空の属性」は失われている

この＜日常＞＜非日常＞の対比を組み込むことで、先ほどの仮の答案も多少はまとまりそうだ。最後の論点を盛り込んで答案を書いてみよう。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、自然災害として現前した時のみその内実である透明な物理現象によって言葉の上での概念が規定される海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。（97字）

表現フェーズ

さて、本問も表現フェーズがかなり重要になった。読解フェーズの最後の答案の問題点を確認しよう。まずは長すぎることが問題である。局所的に言葉を削っても解決しなさそうなので、文章構成の手術をまず行う。文章構成としては、「言葉の上での概念の規定」という表現が繰り返されていることが問題だ。解決方法は二つ考えられる。一つは「言葉の上での概念の規定」を一箇所にまとめること。もう一つは、片方の「言葉の上での概念の規定」を無理やり短くしてしまうことだ。前者を取り組んでみようとするが、「言葉の上での概念の規定」に＜日常＞でも＜非日常＞でも共通して関わるのが「青」ではなく「空や海」であるので、うまくまとめられない。まとめようすると、「空や海」が主題になってしまう。よって撤退。仕方ないので後者の作戦をとる。「平常の言葉の上での概念が規定されている」という状態は、あくまで人間の捉え方の話なので、先ほどの議論で述べた「～として現前する」という表現の意味するところと近い。よって、＜非日常＞の空や海の概念の規定については、「現前する」という言葉で済ませてしまおう。すると以下ようになる。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、自然災害時にのみその内実である透明な物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。（78字）

「自然災害時にのみその内実である透明な物理現象として現前する海や空の」の箇所が読みにくくなったので、ここはむしろ分離しよう。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。（77字）

まだ少し長いか。苦肉の策だが、逆説を簡略化してしまおう。「青」の性質説明を逆説ではなく連体修飾節にしてしまおう。

人間の知覚上にのみ存在する青が、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。（71字）

最後に最も重要度の低い語である冒頭の「人間の」を削る。この語は文脈から自明であるからだ。これで完成である。

知覚上にのみ存在する青が、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。（68字）

赤本

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

「青は穏やかなのに激しいところが不思議である」と主張する答案である。しかし、「穏やかなのに激しい」ことを不思議さと結びつける積極的な根拠はない。「穏やかなのに激しい」ことは、おそらく「空の青こそが、いちばん平凡でいちばん種やかな表情を見せながら、(中略)日常に似ているのではないか。」という部分を根拠にしているのだろうが、この文から「穏やかなのに激しい」ことが青と日常の類似点であることは読み取れても、それが青の不思議さの中核であることを読み取ることはできない。読解フェーズで解説した通り、傍線部をその直後の文章から順に丁寧に検討していけば、穏やかさと激しさという日常と非日常の対比は、あくまで青の不思議さの構図の中の一部でしかないことがわかるだろう。

よって、この答案が根本的に的を外していることは否めない。読解点は零点だ。文章構成は不思議さについて説明する形式になっているが、要点である「幻」の説明も全く不十分であるので、構成点も辛うじて一点残るかどうかわからないところであろう。

駿台（青本）

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

この答案では二つの対比が描かれている。「幻」であることと激しさを内包しながら「平穏な表情を孤独なひろがりとして示す」ことの対比が一つで、さらに、激しさと「平穏な表情」もまた対比されている。まず第一の対比については、「幻」であることと激しさを内包しながら「平穏な表情を孤独なひろがりとして示す」ことの両立は、本文を読んでも不思議であることが自明ではないので、もしそれを不思議さの要点だとするならば、答案の中でその理由を説明する必要があるだろう。次に第二の対比については、赤本の解答の講評で解説した通り、穏やかさと激しさの対比は、青の日常との類似点ではあれど、青の不思議さの中核ではない。よって、この答案も、不思議さについて全く説明できていないと言える。また、「幻」の本質を「隔たり」としてしまっている点も読解不足である。総じて、辛うじて文章構成が不思議さを説明する形式である点しか評価することはできない。構成点が一点与えられれば幸運であると言ったところだろう。

河合塾

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

この答案の骨子は、「幻の色であるところが青の不思議なところ」だということである。これは本文の内容とずれているし、また、そもそも、不思議さの説明として不十分であろう。「幻」が常に不思議とは限らない。よって、構成点・読解点ともに与えられない。

東進ハイスクール

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

まず、「幻であることが不思議だ」では答えになっていない。不思議さの説明に必要な逆説性が答案に見受けられないので、構成点は与えられない。また、局所的に見ても誤読がある。「幻」の本質は距離感ではない。また、「感情」という要素はおそらく「海の青を離れるのは、それを愛するのと同程度に厳しいことなのだ」という文に由来するのだろうが、そこからなぜ「青」が「感情をもたらす対象として感覚できない」ものになるのかは不明である。よって読解点も一切与えられない。

代々木ゼミナール

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

「遠さや孤独」と「現実を変える力を予感させる」ことを対比する根拠は本文に見受けられない。また、その様な「両義性」が不思議であるということも自明ではないので説明が必要だ。局所的に見ても、「遠さや孤独を感じさせること」は「幻」の説明として不適切である。また、「幻」が「現実」へと姿を変えるのであり、「幻」が「現実」を変えるのでは無い。以上のことから、この答案も文章構成が不思議さを説明する形式である点しか評価することはできない。構成点が一点残れば幸運であろう。また、点数には関係しないが、「両義性」という言葉遣いも気になるところだ。「遠さや孤独」と「現実を変える力を予感させる」ことという二項は「義」なのだろうか？「両面性」だったら納得できる可能性が残されているが、「両義性」では表現が不適切だろう。

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

赤本や青本と同じく、「青は穏やかなのに激しいところが不思議である」と主張する答案である。しかし、赤本や青本の解答の講評で解説した通り、穏やかさと激しさの対比は、青の日常との類似点ではあれど、青の不思議さの中核では決して無い。また、青本の答案と同様、「幻」の本質を距離の問題として捉えている点も誤読である。よって、この答案も、文章構成が不思議さを説明する形式である点しか評価することはできない。構成点が一点残れば幸運であろう。

設問（三）

問題	「そういう裏面のある日常」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	単調な日常の表面的な維持には、内心の暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く刷新することが必要だということ。（63字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 設問文読解 ・ 傍線部読解 <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「裏面」とは何か？「裏面」に対応する“表面”は何か？ ・ 「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことか？ ・ 指示語「そういう」は何を指示しているか？修飾対象は「裏面」か「日常」か？ <p>表現フェーズ</p>

設問文は「どういうことか、説明せよ。」という形式だ。これ自体はよくある形式なので、傍線部も見てみよう。この段階で挙げるべきポイントは三つある。傍線部の第一のポイントは、最初の指示語「そういう」である。傍線部だけをみる限りでは、「そういう」が「裏面」という語にかかっているのか「日常」という語にかかっているのかはわからない。読解を進める中で検討する必要があるだろう。第二のポイントは、「裏面」が比喩的な表現であることだ。「裏面」があるということは「表面」が前提とされているということであるので、この対比の構図を答案に表現することが求められるだろう。ただし、傍線部が「日常に裏面があること」という言い方ではなく、「裏面のある日常」という言い方であることから、あくまで傍線部の力点は「裏面」ではなく「日常」にあるため、答案の着地点も「日常」に合わせることは忘れないようにしたい。第三のポイントは、半ば読解フェーズにまたがることではあるが、傍線部に続く文の内容についてだ。傍線部のある文は、「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いと述べている。よって、なぜ「日常」は「季節の乱脈な天候」と相性が良いのかを考えなければ、「そういう」や「裏面」と言った言葉の意味は確定しないだろう。以上の点を踏まえて、読解フェーズでは以下の問いを総合的に検討していくことにしよう。

- ・ 指示語「そういう」は何を指示しているか？修飾対象は「裏面」か「日常」か？
- ・ 「裏面」とは何か？「裏面」に対応する“表面”は何か？
- ・ 「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことか？

読解フェーズ

まず、「そういう」の中身について検討していこう。「こういう」ではなく「そういう」であるので、ある程度広い範囲を指示していると考えられる。よって、とりあえず傍線部のある第十段落の最初から見てみよう。最初の三つの文である「単調な日々を単調なまま過ごすには、(中略)どこまでも平坦である」からわかるのは、「心」における「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」の対比だ。綺麗な対比の構図がありそうなので、記述を出てきた順番でアバウトな等式関係で結んでみる。

- ・ 「単調な日々」＝「外から見た心の動き」＝「表」＝「平坦」
- ・ 「暴発的なエネルギー」＝「自分の心のなかで静かに処分する」＝「表にあらわれてることではない」

わかりやすい動と静の対比構図だ。ただ、最初の文章にあるように、単純な対比関係ではなく、「暴発的なエネルギー」は「単調な日々」を成立させるために必要なものであるという依存関係もあることは注意しなければならない。「万物流転」「諸行無常」といった思想が古今東西にあることを考えると、この考え方は納得感があるだろう。一番難しいのは変わらないことなのである。

続く文章を見てみよう。(A)「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剥ぎとる」とある。これはどういうことか？（後に参照するために問いに記号をつけた。）「内壁が劣化」した場合に「危ない壁」を剥ぎ取るとされているので、この「内壁」と「壁」は同じものだと考えて良いだろう。では、(A')そもそも「壁」とは何のことを指しているか？傍線部の前には手がかりが見つからないので、傍線部の後を見るしかない。傍線部のある文では、(B)「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いことが述べられている。これはどういうことか？相性が良いということは、おそらく「日常」と「季節の乱脈な天候」の間に少なからず類似点があるのだろう。その様な目星をつけて、次の第十一段落を見てみる。最初の文に「青空」と結びつける形で「見えるはずのない内側の崩れの兆し」とある。まず「見えるはずのない内側」は「暴発的なエネルギー」と非常に似ていることがわかるだろう。「暴発的なエネルギー」は「自分の心のなか」にあり、「表にあらわれ得ることはない」ものであった。そこで「見えるはずのない内側」と「暴発的なエネルギー」が同じものだとして考えると、「崩れの兆し」の箇所もまた「内壁」についての記述と似ていることに気づく。「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性」とあったことを思い出そう。このことを踏まえると、「見えるはずのない内側の崩れの兆し」と「『暴発的なエネルギー』を隠し持った『日常』の『内壁』の『劣化』の『危険性』」が同じものであることがわかる。

以上のことから、「青空」と「心」がどうやら同じ構図を持っているらしいことがわかるだろう。それを踏まえて、「青空」についての記述（第一段落～第六段落）から、「壁」を視覚的に連想できそうな表現を第十段落に限らず探していくと、第三・第四段落の「破れ目」と第五段落の「感覚の水位」が見つかる。このことから「青空」における「壁」は、晴天と荒天の間を隔てていたものであり、また、筆者がその破れ目を待つことで、＜日常＞と連続したものとしての＜非日常＞を「予感」していたものであることがわかる。ここから「心」における「壁」を逆算すると、「暴発的なエネルギー」と対比されているのは「単調な日々」であったのだから、「心」における「壁」は「暴発的なエネルギー」と「単調な日々」の間を隔てるものであることがわかる。これが問い(A')の答えだ。なお、このことは本文全体に関する読解であるので、本文解説で述べた全体イメージを参照してほしい。

元の問いである問い(A)についても考えてみよう。「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剥ぎとる」とはどういうことか？「壁」とは「暴発的なエネルギー」と「単調な日々」を隔てるものなのだから、「全体の均衡」とは「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」の均衡、つまりは「心」のバランスのことであることがわかる。だとすると、その均衡が崩れかけた際に、その均衡を保っていた「壁」を一掃してしまうとはどういうことか？一掃してしまうと、むしろ均衡の崩壊は加速してしまうのではないか？これについては、再び第十一段落に手がかりがある。最初の文に「見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙に中和する」とある。「壁」を一掃した結果起こるのは、崩壊の加速ではなく、「中和」であるのだ。だとすれば、「中和」されるのは、「単調な日々」と「暴発的

コラム：言葉と概念と規定とあなた

この設問の読解フェーズでの議論は、概念の本質は何か、平たく言えば「それをそれたらしめているものは何か？」という問いに直結している。これは哲学でも古くから議論されてきた問いだ。例えば、この問いの答え方の一つの方向性として、この本文とも近いもので言うと、本質はその概念の客観的性質の中にあるという考え方ができる。さらに本文にあった「属性」という言葉に絡めて言えば、实在論という哲学の分野において、アリストテレス以来、「属性(attribute)」と「性質(property)」という区別がされることがある。前者は本質を定義する性質であり、後者は別に欠けてても良い性質のことを指す。これは本文での「属性」の意味とほぼ同じであると考えて良いだろう。もちろん、「いや、どの性質もその概念の本質を規定するのに必要なのだ」とか、「概念の本質は、客観的な指標では決まらない」とか、違った考え方をすることも可能だ。興味があったら考えてみてほしい。

言葉と概念の関係も、この本文の議論に深く関わる論点だ。まさにこの設問の「青の不思議なところ」が指摘する様に、結局私たちは何事も言葉によって表現することが多いので、もはや何事も言葉によって規定されているのではないかと思えるところがある。このことについての問いを最初にちゃんと立てたのは、フェルディナン・ド・ソシュールとルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインである。ソシュールは、言葉で指示される概念は差異によってのみ支えられているとした。これだけではわかりにくいので例を出そう。「机」と「椅子」の二つは全く違う概念に思える。しかし、例えば、ちょうど座れそうでも物書きができそうでもある高さで、かつ背もたれが無い四本足の台が何の説明もなく置いてあったとする。あなたはそれを何と呼ぶか？ここで言いたいのは、「机」と「椅子」も、物体の上での明確な線引きはできないということだ。その意味で、「椅子」とは、「四本足の台」界の中の「机」ではないものなのであり、逆に「机」は「椅子」ではないものでしかないのだ。もしかしたら、ある言語では「机」「椅子」という言葉は無くても、「台に座る」とか「台で書く」とか言っているかもしれない。言葉の体系としてはそれでもあまり問題はなさそうだ。こうして考えると、あれ、言葉が概念を示しているのか、それとも言葉に概念が当て振られているのか、わからないようになってきたのではないか？実はこんな議論も全て吹っ飛ばしてしまうのがウィトゲンシュタインである。彼が問いに立てたことは、「結局どんな抽象的な概念について言葉で議論しても、それって『その言葉で示したその概念』でしかなくて、『その概念』そのものじゃないよね？じゃ、『その概念』について議論するのは無理じゃね？」ということである。例えば私は「美」について語りたい。しかし「美」について何を語ったところで、それは「『美』という言葉で表された美」でしかなくて、それは素晴らしい絵画を見たとき心の中に浮かぶあの「美」ではあり得ないのだ。何と悲しいことか。しかし、これに反論するのはかなり難しい。なぜなら、この文章自体も、何を言おうと所詮は「言葉で示されたそれ」でしかないのだ。仕方ない、だとしたら、唐突だが、ここで筆を置くしかない様だ。

なエネルギー」だと考えるのが妥当だろう。つまり筆者によれば、「心」の均衡が崩れかけた際には、その均衡を立て直すのではなく、むしろ異質なものを一挙に「中和」させてしまい、新たな均衡を作り出すことが必要なのだ。

このことは、先述の問い(B)の答えにも関連しそうだ。「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことか、という問いである。「心」には「中和」が必要であり、「中和」には「青空」が必要なのだ。なぜなら、「内側の崩れの兆し」が「見えるはずのない」ものであるからである。「見えるはずのない」からこそ、見える「青空」に投影していたのだ。その意味で、「季節の乱脈な天候」は「裏面のある日常」と相性が良いのである。

ここまでをまとめる。人間の「心」は外面的には「単調な日々」である様に見えるが、実はそれと対照的な「暴発的なエネルギー」によって支えられている。言い換えれば、「暴発的なエネルギー」を静止させ続けることこそが外面的な「単調な日々」の内実なのである（ちなみに「静止」という単語は第九段落の最後の文章で用いられている）。その「単調な日々」（“表面”）と「暴発的なエネルギー」（「裏面」）の間を隔てているのが「壁」であるが、それは時として劣化し崩れて「心」の均衡が崩れてしまう危険性がある。そうした際にはその「壁」をむしろ一挙に剥ぎ取って、「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」を「中和」させてしまう必要があるのだ。ただし、「壁」の崩壊は、あくまで外から見えない事柄なので、それを見る世界に投影する必要がある。筆者にとって、それが「青空の急激な変化」、のだ。なぜなら「青空」もまた「壁」を持ち、晴天が荒天が隣り合わせに連続して存在するものだからである。

これで読解フェーズで挙げた問いには答えが見つかった。ここまで来れば、「そういう」という指示語は「日常」にかかっていることがわかる。「裏面」のみが重要なのではなく、「裏面」を含んだ平常の均衡と、その崩壊時の「中和」こそが重要なことから。よって、答案も「日常」を中心に書いてみよう。まずは、一旦本文の言葉をそのまま用いて、答案の骨子を確認する。

「単調な日々を単調なまま過ごすには」、「暴発的なエネルギー」を「裏面」として静止し続ける一方で、「内壁が劣化し、全体の均衡を崩す危険性があれば」、「中和」することが必要だということ。

次に、言い換えを行う。読解フェーズでは字数は気にしない。

単調な日常を表面的に単調であり続けさせるためには、その内側にある暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れかけた際には、むしろ思い切って静止を止めることで、新たな均衡を作り出すことが必要だということ。（103字）

表現フェーズ

またもや表現フェーズが重要になっている。文章構成を大きく改善できる点はないので、個別の表現を変えるしかない。（変えた箇所に下線を引いている。）

単調な日常を表面的に維持するためには、内心の暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れる直前に、むしろ潔く静止を止めることで、均衡を刷新することが必要だということ。（86字）

次に、重要度が比較的低い語を省略していく。

単調な日常を表面的に維持するためには、内心の暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れる直前に、むしろ潔く静止を止めることで、均衡を刷新することが必要だということ。

↓

単調な日常を表面的に維持するためには、潜在的な暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く均衡を刷新することが必要だということ。（70字）

最後に、動詞をできるだけ名詞化する。（変えた箇所に下線を引いている。）

単調な日常の表面的な維持には、内心の暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く刷新することが必要だということ。（62字）

他社解答例の講評

赤本

答案



Schip採点 2点 読解点：0点 構成点：2点 表現点：0点

大まかに構成要素は揃っているが、詳細に見ると三つの問題点がある。第一に、「蓄積した」とあるが、「暴発的なエネルギー」は存在はすれど、蓄積しているとする本文の記述は無い。第二に、「暴発的なエネルギー」を「感情の暴発」としているが、本文にはあくまで「心」と述べられているのみであり、本文の「心」を「感情」だとする根拠は乏しい。第三に、「密かに処理し解消する」の箇所に、本文の「均衡を崩す危険性」という要素や、「平然と剥ぎとる」「一挙に中和する」のニュアンスは含めた方が良好だろう。これらの問題点があるため、読解点が二点減点される。

駿台（青本）

答案				
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点

赤本と同様、「孤独に処理しなければならない」の箇所に、本文の「均衡を崩す危険性」という要素や、「平然と剥ぎとる」「一挙に中和する」のニュアンスを含めた方が良い。この点につき、読解点が減点される。

河合塾

答案				
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点

「暴発的なエネルギー」は処分（「中和」）される対象であり、その処分の結果、（第十二段落にある）自分の「変貌」が起きるので、「暴発的な力で内面を更新する」は誤読である。よって、読解点が減点される。

東進ハイスクール

答案				
Schip採点	1点	読解点：1点	構成点：1点	表現点：-1点

「暴発的なエネルギー」が「単調な日々」にとって必要であるという最も重要な点が明言されていない。このことは必要な要素であるだけでなく、最も重要な読解ポイントでもあるので読解点・構成点が共に減点される。また、表現の面では、第一に長すぎるのが問題だ。第二に、「時に生じる不穏」が曖昧すぎることも問題である。おそらく、「平穏」という語と対比させる形で「全体の均衡を崩す危険性」のことを示そうとしたのであろうが、どんな「不穏」なのか説明することこそが重要である。以上から表現点も減点される。

代々木ゼミナール

答案				
----	--	--	--	--

Schip採点	2点	読解点：1点	構成点：1点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

「暴発を起こしかねない」ことではなく、それを処分（「中和」）することについて言及しなければならない。「全体の均衡を崩す危険性」について読解されていることも示されていないので、構成点と読解点が共に減点される。

スタディサプリ（制作：旺文社）

答案				
Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：1点	表現点：0点

「暴発」の「処分」について述べられていない。よって構成点が減点される。また、表現の面では、「暴発」が「生の均衡を突き崩しかねない危険」と「平穏を維持するための多大な力」に分散して記述されており、あたかも別の概念のように語られてしまっていることは問題である。

設問（四）

問題	「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られた」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	空の青が赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したとは言え、斯様な日常の崩壊と再生の連鎖こそが筆者の体験の質を高めていくのだということ。（71字）

構成フェーズ

- ・ 傍線部は変化について述べている。ということは？
- ・ 変化を起こしたのは何か？

読解フェーズ

思考の目次

- ・ 「赤い風船」はどんな点で「青空」のイメージのと対照的か？他方で、共通点はあるか？
- ・ 「赤い風船」は筆者の営みの何を否定したのか？その上で、傍線部の「自負」と「願望」とはそれぞれ何か？
- ・ 筆者はなぜ「奇妙な喜び」と「茫然」を感じたのか？

表現フェーズ

構成フェーズ

傍線部は変化について述べている。よって、基本的には「AからBに変わった」という構成で回答するのが良いだろう。ただし、ここでは「貴重な青」を「吸収」した「赤い風船」も重要である。「赤い風船」によって、「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られる」わけであるが、それによって筆者は、「奇妙な喜び」と「茫然」を感じたのである。これが変化の結果である。よって、この三段構成で回答するのが良い。骨子としては以下のようなになるだろう。これ自体は当たり前のことに見えるかもしれないが、それぞれについて読み解くのはなかなか難しい。だからこそ、読解の過程で俯瞰的な視座を失わないようにしよう。

＜赤い風船＞によって、＜青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られ＞、＜奇妙な喜びと茫然を感じるようになった＞ということ。

読解フェーズ

内容について詳細に検討していこう。多少読解が難解なので、ひとまず設問に回答することは忘れてじっくり本文を読んでいくべきである。まずは＜赤い風船＞について見てみよう。その色からしてもすぐに「青空」と対比的であることはわかるだろうが、その仔細を丁寧に追うことが必要だ。ここでポイントは三つある。

一つ目は、その動きのリズムである。「赤い風船」は「ふわりふわりと」「一段一段弾むように」「おなじリズム」で動いているのである。「青空」は急変するものであった。ここに第一の対比がある。

続く二つ目のポイントは、「天を目指さず」「降りて行く」ことだ。「青空」のイメージでは、
 <非日常>の体験を通じて「日常の感覚の水位が上がる」ものだった。上下の対立がここにある。
 そして空自体までが「地上へと引き戻される」のである。ただここで少し注意して欲しい。「赤
 い風船」は、「青空」自体と、「青空」を見つめる筆者の二つと同時に対照されている。先ほど
 述べた通り、「赤い風船」は「青空」と対比的な色、そして対比的な動きのリズムを持っていた
 わけだが、同時に「人の頭ほどの赤い生きもの」でもあるのである。そして、「貴重な青」と「こ
 ちらの視線」は「いっしょに地上へと引き戻される」のだ。以上の二つのポイントを整理した。

赤い風船	青空
赤という色	青という色
坦々/泰然と動いている	急変する
「天を目指さない」「降りて行く」 「人の頭ほどの赤い生きもの」	「貴重な青」と筆者の「視線」がともに 「地上へと引き戻される」

だがここで——これが三つめのポイントだが——「赤い風船」は「青空」と対比的であるだけで
 はないことに気づいて欲しい。風船とは通常は上昇していくものではなかろうか。「飛翔の力を
 失った赤い風船」。「力を失った」ということは、その力は元々はあったということだ。これは
 風船にとっての異常なのであり、つまるところこの「赤い風船」自体がまた新たなく非日常>
 であるのである。

このことを踏まえると、「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去
 される」ことについても、幾分か輪郭がはっきりしてくるのではなかろうか。「赤い風船」に
 よって消し去られたものは何か？「小さな変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め、(中略)べ
 つの出来事を呼び寄せる」ものであったこと、そして本文の最後が「再び失われた青の行方を告
 げるように、遠く、雷鳴が響いていた。」と締めくくられていることを考えると、筆者のこの「破
 れ目を縫い直したあとでまた破るような」営みのサイクル自体が失われたしまったとは考え難
 い。だとすれば、「赤い風船」それ自体が新たなく非日常>であるのだから、「赤い風船」はこ
 の営みのサイクルを新たなサイクルへと刷新した、と考えるのが妥当であろう。「青空の明滅」
 に対する自己の内面の投影は終われども、このような崩壊と再生のサイクルは続いていくのであ
 る。

だとすれば、「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られる」
 における「自負」と「願望」とは何だろうか？

「願望」はわかりやすいだろう。平穏な日常に欠かせない自己の暴発的な内面は、それ自体見
 えぬものだからこそ、どこかに投影する必要があったのだ。

では、「自負」とはどういうことか？「自負」という言葉が用いられているということは、他者の営みを考慮に入れる必要があるということだ。自負は他者と対比したの中で初めて成立するものだからである。本文の中で他者の営みについて言及があったとすれば、最初の話題である「青空」における「予報」についての記述が思い出される。「晴れわたった青空のもと街を歩いていて、すれちがいざま、これから降るらしいよといった会話を耳に挟んだりすると、何かひどく損をした気さえする」。これが普通の人の営みである。しかし筆者は「しばらくのあいだ青を失っていた空の回復を、私は待つ。崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする」のであった。つまり、筆者は、青空という対象について、その日常と非日常の交差を感じ取ることができる、その営みを体現することができるということに自負があったことが窺える。

だとすれば、そうした営みの対象として依存していた「青空」が消え去ってしまったことは、衝撃的であるはずだ。これこそがきっと「茫然」の正体なのだろう。だが一方で、こうした営みを恒久的なものとしていくためには、「赤い風船」というまた異質なく非日常の出現は歓迎すべきことでもある。こうした「変貌の断続的な繰り返し体験の質を高め」るのだ。読んでる私までもが思わず高揚感を感じてしまった。「奇妙な喜び」とは言い得て妙かもしれない。

さて、これらを踏まえると、解答としては、大きく二つの部分に分けて記述すると良さそうだ。一つは、＜自負と願望が消し去されたこと＞、もう一つが、＜営みのサイクルが続いていくこと＞である。そして、あえて大まかに言えば、前者は「茫然」であり、後者は「奇妙な喜び」なのであるから、これらのニュアンスも行かせたら尚良い。一旦、字数を気にせず書いてみよう。

筆者は、青空の急変と回復の中に自己の内面の暴発を見出していたが、坦々と歩道橋を下降する赤い風船という新たな非日常が突如出現したことにより、依存していた青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と非日常から再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験へ質を高め続けることができるのだということ。（153字）

表現フェーズ

書きたいことが多すぎる。大胆な改革が必要であるようだ。泣く泣く、重要度の低い単語を一掃してみよう。

筆者は、青空の急変と回復の中に自己の内面の暴発を見出していたが、坦々と歩道橋を下降する赤い風船という異なる非日常が突如出現したことにより、依存していた青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と非日常から再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験へ質を高め続けることができるのだということ。

↓

筆者は、青空の急変に内面の暴発を見出していたが、赤い風船という異なる非日常により、青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験の質を高め続けるのだということ。（111字）

まだ長い。。。まずはできるだけ意味を保存したまま単語を短くする。また、前半の主題は実は「青空」であるので、それを主語にしてしまい、筆者の営みの説明はこれまた泣く泣く削る事にした。

空の青が赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したとは言え、斯様な日常の崩壊と再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験の質を高め続けるのだということ。（75字）

まだ多少長いか。若干無理があるような気もするが、後半の構文を簡単にするため、無生物主語を使う。「連鎖」を主語にしてみた。苦肉の策だが、これで完成だ。

空の青が赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したとは言え、斯様な日常の崩壊と再生の連鎖こそが筆者の体験の質を高めていくのだということ。（71字）

他社解答例の講評

赤本

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

本質的に何も説明していない。ただ傍線部に「赤い風船によって」という情報を足しただけである。まず、「青空の急激な崩れという非日常を歓迎したい」という前半部はあまりに曖昧である。せめて「なぜ歓迎するか」について一言言及して欲しかった。むしろ傍線部の「青の明滅に日常の破れ目を待つ」という文言の方が本文の内容についての情報量が多い。次に、この解答のポイントはきっと「風船」という物体の「膨らんでいる」というイメージの転用で「気分がしぼんだ」という解釈が成り立つ、という点なのだろうが、本文にその解釈を支持する根拠は見当たらない。よって、この答案は何も説明していないことになる。

駿台（青本）

答案				
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点

赤い風船は「別の非日常」であるという点は同意できる。しかし、「思いが否定された」だけでは、筆者の営みのどこが否定されたかが曖昧なままだ。また、「快く」だけでは何も感情の説明になっていない。なぜ否定が「快く」もあったのか。それらが曖昧なまま回答されているため、読解点を減点した。

河合塾

答案				
Schip採点	1点	読解点：0点	構成点：1点	表現点：0点

自己刷新自体への確信や期待は失われていないと考えるのが妥当だろう。自己刷新自体は「べつの出来事」においても続いていくのである。自己刷新自体への確信や期待を失わせてしまったことから、「奇妙な喜び」の説明もできていない。それまでの信ずるものや期待していたものが一掃されて何が喜ばしく思えるのだろうか？「自負」について述べようとはしているが、自負であるからには「確信」という言葉よりは「自信」という言葉が適当であろう。

東進ハイスクール

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：1点	表現点：-1点

長すぎる。かつ読みにくい。最初の句読点までの節と次の動詞節が「待望」という名詞にかかっているのだろうが、かなりわかりづらい。これでは、「暴発」を空に重ね合わせたり新たな出来事を呼び起こすのが、筆者の青の明滅に対する感性や営みではなく、「待望」自体であるように見える。それはおかしいだろう。また、「心の暴発」という言い方も気になる。単に広く「心」ではなく、その内面性が問題となっているのであった。また、「待望」が消えたというだけでは、この答案も、筆者の営みのどこが否定されたかについて曖昧性を残してしまっている。

代々木ゼミナール

答案				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

この答案は、赤い風船によって「高揚した気分」が「現実」に引き戻されたと主張している。つまり、青の明滅に自己の内面を重ね合わせる営みはいわば「現実離れしていた」「浮き立ってい

た」たということであるが、これについて本文から明確な根拠は見出せない。また、「自負と願望」が一言で「高揚した気分」に置き換えられてしまうのはあまりに乱暴だ。「奇妙な喜び」についての説明しようとしている気配はない。

スタディサプリ（制作：旺文社）

答案					
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点	

それなりに綺麗にまとまっている。だが、「世界が改まる」とは何のことを指しているのか不明瞭だ。また、「奇妙な喜び」についての説明もない。

※他社解答例の採点結果（最高点は20点）

	赤本	駿台（青本）	河合塾	東進	代々木
設問1	3点	2点	3点	3点	0点
設問2	0点	0点	0点	0点	0点
設問3	2点	3点	3点	1点	2点
設問4	0点	3点	1点	0点	0点
合計	5点	8点	7点	4点	2点
得点率（%）	25%	40%	35%	20%	10%

引用文献・著作権表示

本PDFファイルの著作権及び著作者人格権は、全て任意団体Schipに帰属します。

無許可での本PDFファイルの複製と再配布は、これらを全て禁じます。

他社解答例の講評欄で言及している解答例は以下の出典より引用しております。

- ・ 「赤本」：『2017年版大学入試シリーズ東京大学（文科）』教学社編集部・編 2016年
- ・ 「東大の現代文25カ年」：『難関校過去問シリーズ 東大の現代文25カ年 [第8版]』桑原 聡・編著 2016年
- ・ 「青本」：『大学入試完全対策シリーズ 2017・駿台 東京大学 [文科] 前期日程(上) 2016～2012/5か年』駿台予備学校・編 2016年
- ・ 「河合塾」：河合塾webサイト 大学入試解答速報 <http://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/honshi/16/t01.html>（閲覧日：2016年12月10日）
- ・ 「東進ハイスクール」：東進ハイスクールwebサイト 大学入試過去問データベース by 東進 <http://220.213.237.148/univsrch/ex/menu/index.html>（閲覧日：2016年12月10日）
- ・ 「代々木ゼミナール」：代々木ゼミナールwebサイト 2016年度大学入試問題と解答例 http://sokuho.yozemi.ac.jp/sokuho/mondaitokaitou/1/1265579_4420.html（閲覧日：2016年12月10日）
- ・ 「スタディサプリ（制作：旺文社）」：「スタディサプリ」アプリケーション内 大学入試過去問 東京大学 <https://studysapuri.jp/SC000073/kakomon/000000000000132501>（閲覧日：2016年12月10日）